

戦争の 20 世紀にインドが生んだ偉大な魂
今も広がる [非暴力] の源泉

母なるガンディー

山折哲雄 著





地人館 E-books デモ版
紙面のイメージは電子版と異なります。

山折哲雄 (やまおり てつお)

1931年、サンフランシスコ生まれ。岩手県出身。

東北大学文学部印度哲学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。

駒沢大学、東北大学文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、所長などを歴任。同センター名誉教授。思想家、宗教学者。2002年、『愛欲の精神史』で和辻哲郎文化賞受賞。

主な著書

『生老病死』(KADOKAWA) 『米寿を過ぎて長い旅』(海風社)、『「身軽」の哲学』(新潮社) 『激しく考え、やさしく語る 私の履歴書』(日経 BP) 『ひとりの覚悟』(ポプラ社) 『老いと孤独の作法』(中央公論新社) 『「歌」の精神史』 『わが人生の三原則』(中央公論新社) 『危機と日本人』(日本経済新聞出版)、『聖と俗のインド』(地人館 E-books) など多数。

母なるガンディー

著者 やまおりてつお 山折哲雄

初版発行 2021年8月30日

発行 ちじんかん 地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

©2021 Tetsuo Yamaori

はじめに——再刊にあたって

今なぜ、ガンディーが現代によりみ返るのか。長いあいだイギリスの植民地だったインドを独立にみちびいた、たぐいまれなリーダーだったからだ。

世界の現状をみてほしい。

いぜんとして民族と宗教、貧困と差別をまきこんだ戦争がたえない。戦争とテロによる殺し合いがおさまらない。

そんなとき、かつてガンディーが説いた非暴力と不服従の方法が、あらためて注目を集めるようになったのだと思う。

最近のことでは、たとえばミャンマーにおいて、軍事政権にたいする民衆のはげしい抵抗がおこっている。中国大陸では香港における市民的な不服従の運動は尋常なものではなくなっている。圧倒的な暴力にたいしては、もう非暴力でたたかう以外にはないという、緊迫した状態が深刻化しているのである。

ガンディーの非暴力の思想は、かつてアメリカ大陸やアフリカ大陸で広がりを見せ、今や東アジアや東南アジア、そしてこの日本列島にまで及ぼうとしている。

ガンディーよ、ふたたび、の声があがるゆえんである。

もう一つ、つけ加えておきたいことがある。

周知のように、この世紀の変わり目あたりから、世界は深刻な人種差別や格差社会の拡大に苦しめられるようになった。それで「ブラック・ライブズ・マター（黒人を救え）」「ミー・ツー（女性を解放せよ）（女性を侮辱するな）」などのスローガンが叫ばれるようになった。これらの問題についても、ガンディーはその反英独立闘争のなかでいち早く取りあげていたことを思い出す。パートナーとの従属的な性関係をいかにのり越えていくか、女性こそが非暴力の本当の担い手ではないか、などの問題提起をしていたのである。やがて彼は「性」ののり越えが「国家」ののり越えの理念と表裏一体の関係にあることを主張するようになるのである。

本書の再刊が、これらの問題を考えるための一助になれば、これに過ぐる喜びはないのである。

二〇二二年七月一〇日

山折哲雄

*本書は『母なるガンディー』（潮出版社2013）の電子書籍化による再刊である。

【母なるガンディー】 目次

はじめに——再刊にあたって

プロローグ ガンディーが乗り越えようとしたもの

第1章 ガンディーと家族

第2章 「断食という武器」を見出すまで

第3章 非暴力闘争の深化

第4章 ガンディーと「ガンディー主義」の間

第5章 ガンディーと「母なるもの」

エピローグ ガンディーをいかに受け継ぐべきか

あとがき

ガンディー主要年表

プロローグ ガンディーが乗り越えようとしたもの

ガンディーという存在の「わかりにくさ」

マハトマ・ガンディーは、同じアジアの人間でありながら、われわれ日本人にとってはきわめて理解しにくい人物ではないでしょうか。

よく知られていることですが、ガンディーは人間社会におけるさまざまな差別をどう乗り越えることができるのか、という難問にいつも立ち向かっていました。

その解決のために彼が採用したものに三つの方法があったのではないかと私は思っています。ところが、その方法が、じつを言うとわれわれにはきわめて理解しにくい内容を含んでいました。ガンディーという存在のわかりにくさがそこから出てきます。

その方法とは、第一が「性」の乗り越えという問題、第二が「国家」というものに対する挑戦、そして第三が「断食」に関する大胆な問題提起でした。

まず、第一の「性」の乗り越えについて考えてみましょう。ガンディーには、男と女の差が暴力的なものと非暴力的なものとの差に対応しているのではないかと、という直覚のようなものが

あつたと思うのです。

その直覚は、当然のことながら、政治的暴力や社会的暴力が男性的なものに由来するという認識につながっていました。そして、そのような暴力から真に自由になるには、男性そのもの乗り越える以外に道はない、と考えていたようです。

しかし、そのような道を見出すことが、果たしてわれわれ人間に可能なのでしょうか。それが大問題となつていきました。

ガンディーは若くしてイギリスに留学し、弁護士資格をとつて帰国しましたが、二四歳のときに南アフリカ連邦に渡りました。その地は悪名高い人種差別の国でしたが、彼は多くの人々から推されて反対闘争の指導者になつていきます。

その過程で編み出された戦略の最大のものが、その後世界に知られる「サティアグラハ」（真理の把持）、すなわち非暴力（ノン・バイオレンス）による闘争方式だったのであります。

それは、国家による圧倒的な武力に対して、まったく武器を持たずに素手で立ち向かう闘いでした。そしてこのガンディーの戦略は、結局は功を奏して、彼の名を一躍世界に知らしめることになりました。

けれどもその運動のさなかで、彼は突然、妻との間に禁欲（ブラフマチャリア）の関係を打ち立てることを宣言したのです。妻との間の夫婦の関係を断つことによって、性的な存在としての男性を乗り越えようとしたのです。

このガンディーの決意は仲間たちだけでなく、世間に対しても大きな衝撃を与えることになりました。ところが、彼はこのとき、政治運動としての非暴力闘争が真に力を得るためには、自分の性のあり方を根本的に問い直すことが必要であると固く信じていたのであります。

第二が、さきにも言いましたように、「国家」に対する挑戦という問題でした。

南アフリカ連邦から帰国したガンディーの眼前には、イギリス帝国によるインド支配という途方もない国家による差別という障壁が立ちはだかつていたからです。インドは三〇〇年もの間、イギリスの植民地であったということを思い起こして下さい。

イギリスは、武力という圧倒的な暴力装置を背景に、無防備のインドを十重二十重に取り囲んでいたのです。

そのとき、ガンディーの胸中にはふたたび、男性的な暴力に対しては女性的な非暴力を対置するほかはない、という南アフリカ連邦で得た教訓がよみがえりました。

男性的なイメージに輝くイギリス帝国に対して、女性的イメージにつつまれる裸形のインドの大地を指し示すとき、そこに「非暴力」の思想がくつきりした輪郭を描いて浮かび上がってきたのです。

こうしてガンディーは、その「非暴力」によってイギリスという「国家」を乗り越えようとしたのでありますが、それと同時に彼は、インドという自分の国の枠組みをも乗り越えようとする意志をもっていたことを忘れてはならないと思います。

断食闘争の根底にあつたガンディーの「愛」

第三が、「断食」という方法ということになりますが、これはいま述べたばかりの「性」の乗り越え、「国家」の乗り越えという思想と深いかわりのある方法でした。ガンディーの根源的なライフスタイルを方向づける考え方であり、生き方であつたと私は思います。

ガンディーがその生涯においてたびたび断食をしていることは、よく知られています。とりわけ人間的・個人的な危機に際して、また民族指導者として直面しなければならなかつた危機にあつて、しばしばそれを行なっています。

彼の断食にはもちろんいろんな意味が込められていましたが、イギリスという国家に対する政治的・倫理的抗議としての断食だけをとってみても、じつに十数回にも達しているのです。

ガンディーの母は、ヒンドゥー教で定められている断食を、日常的にたびたび行なっていました。彼の断食への関心が、そうした母の宗教的な態度に刺激されたものであつたことは、いうまでもありません。

また、南アフリカで弁護士をやつていたころの彼は、一種の健康法として断食をやつていました。便秘のとき、発熱したとき、頭痛がするとき、腹が立ったり元気がなかつたりするときに、それをやるのだと言つていたからです。

後年になってインドに帰つてからも、彼は工場のストライキに際し、労働者の側に立つて指導することがありました。そうしたときも、工場主側に翻意を促すために断食の拳に出ています。

それは工場主側にとっては一種の脅迫行為に見えたかもしれませんが、ガンディーの真意は、むろんたんに圧力をかけたり脅迫したりするものではありませんでした。

なぜなら、彼は、

「私は自分を愛してくれた人たちを改造するために断食したのである。暴君に対して断食することはできない」

と言っているからです。

断食によつて相手に一定の政治的圧力をかけて反省を迫りながら、同時に愛による相互理解の回路を発見しようとしていたといつていいでしょう。

こうしたガンディーの方法は、インドの独立運動の過程でもいたるところで用いられていました。イギリス当局との交渉のなかで、その決定的瞬間にはこのガンディーの断食行動が、敵味方のそれぞれの陣営の期待と懷疑や欲望のなかで登場してきます。

ガンディーにとつての断食は、何よりも人間的な欲望の根源を問い直す意味を持っていました。それは同時に、暴力という本能的な衝動に対する風変わりな挑戦の方法でもあつたと思います。

断食というきわめて個人的な異常行動が、局面の急変のなかで予想外の政治的効果を發揮することがしばしば起こるのですが、その原因もいま述べたようなことが彼の断食行為の背後にあつ

たからではないでしょうか。

ガンディーはガンディーに固有の確信にもとづいて、あらゆる「差別」の乗り越えという困難な課題に取り組んでいたと思うのであります。

最後の挑戦——「母」になろうとしたガンディー

最後に、もう一つだけ、どうしても言っておかなければならないことがあります。ガンディーの最晩年における重大な問題です。ガンディーが自らに課した途方もない実験、と言っているでしょう。

第二次世界大戦の末期、一九四四年に、ガンディーはイギリスによって逮捕・投獄されました。独立運動の同志でもあった妻のカストルバイーも一緒に投獄され、獄中で共同生活を送るようになりますが、カストルバイーは不運にも獄中で亡くなってしまいました。

このときに彼女は、「自分が死んだあとは、自分が引き取って育てていたマヌーベンという姪の母親代わりをしてほしい」という遺言を、夫のガンディー宛てに遺します。これを知ったガンディーは、妻の気持ちを汲んで母親代わりになってきちんと育てようと決意します。

インド独立後に出獄したガンディーは、そのマヌーベンを手元に置いて教育を始めました。マヌーベンの心理的・生理的な内面にまで立ち入って、まさに母親がするような配慮としつけを注

ぎこもうとするものでした。

さきに触れたように、南アフリカ時代にガンディーは、ブラフマチャリア（禁欲）の誓いを立てました。しかしこのときのガンディーには、いかに「母」になるか、いかに「母性」を獲得するか、といったような問題意識はなかったと思います。第二次大戦時代の反英非暴力運動の過程においてもなかつたと思います。

それがたまたま妻の遺言によって、若い娘を母親として教育しなければならぬ局面に直面しました。そのとき初めて、自分の非暴力はこの「母性の獲得」というところまで行かなければならない、と直観したのではないでしょうか。

彼はただちにそのことを実行に移していきます。母性獲得のためさまざまな実験を試みるのですが、そのうちついにマヌーベンとベッドを一つにして眠り、母親のような愛撫をくり返して、娘の成長を見守るといふ教育の実験に入っていました。

ガンディーとしては、「母親」になるためには、母親と娘が一緒にベッドに寝るように自分も寝なければならぬ。そのうえでなお、自分が男性であることを乗り越えることが果たしてできるのか、そこに自分の非暴力が本物であるかどうかの分水嶺ぶんすいれいがあると考えたのではないのでしょうか。

これはいかにもガンディーらしい実験であり、挑戦であるというほかはありませんが、世間の目から見ればこれほど危うい実験もありませんでした。

その報いに、彼はさらされることになりませぬ。

ガンディーは、サティアーグラハ（非暴力による闘争）の実験者として、私的な秘密を一切持たないことをモットーとしておりました。そのため、このようなマヌーベンとの生活のこまごまとした内容を包み隠すことなく、逐一その機関誌に発表していきましました。

当然のことではありますが、この実験には社会的な非難と攻撃が集中しました。彼がいかに妻の遺言によるものだと言つても、また、その実験には自分の非暴力を見極める意味があるのだと抗弁（べん）しても、彼の真意が世間に伝わることはありませんでした。同志や弟子たちがしだいに離れ、ガンディーの孤独が深まつていったのであります。

しかし、インドが独立を果たしたのち、マヌーベンは『バプー、マイ・マザー』（『ガンディーおじさん、私の母』なる回想記を出版し、自分がいかにガンディーによつて生まれたかを振り返つています。

「バプー」とは「慈悲深い父親」といった意味のヒンディー語で、民族運動の指導者、民族解放の父、という敬意が込められた呼称であります。彼女はそれに「マイ・マザー」（私の母）という副題をつけていたのです。

マヌーベンにとつて、ガンディーはまさに「マイ・マザー」以外の何者でもなかつたというところがわかるでしょう。

ガンディーは母親にならうとして、自分の男性という性を乗り越えようとする実験をしたので

した。ところがどうしたわけか、この実験は、その後のガンディーの多くの伝記作家たちからはほとんど無視されてしまいました。これまで数かぎりない「ガンディー論」が書かれてきましたが、彼の最晩年におけるこの実験を正面から見据えて、その意味を解き明かそうとする試みは、今までであらわれなかったと言つていいでしょう。

ガンディーの実験は、たんに男性性を否定するだけのものではなかったはずで、人間はすべて、男性はその内面に女性的なものを抱え、同様に女性もまたその内面に男性的なものを抱えています。

男性と女性が互いに対立する性の価値を内面的に理解するとき、男と女は新たな成熟のときを見せ始めるはずで、

ガンディーはいつも、自分の内面の女性的なものの価値を再発見しようとしていました。

それによつて、男性対女性という関係の価値的な逆転を実現しようとしていたのでしょう。そのための実験だったのではないかと私は考えます。

それと同時に、人類史的な視点からすれば、老年というのはそもそも精神的にも肉体的にも衰えていく年代であります。そうした老年を迎えた人間にとつて、若い世代の存在がいかに大きな慰めになるかということも、このガンディーの晩年は暗示しているように思います。

このように考えてくると、ガンディーの行なつた実験は、現代社会における男と女の関係、あるいは高齢化社会における高齢者と若い世代との関係に新しい光を投げかける試みでもあったと

言えるのではないでしょうか。

人はなぜこれほど殺し合うのか。人はなぜこれほど人を差別するのか。ガンディーは非暴力運動の実験によって、その問いに正面から答えようと思いました。

性そのものを乗り越えようとする、男性がいかに女性になり得るか、どうしたら男性が母性を獲得できるのか、そうした日々の実験を通して、世界の平和、非暴力の世界を実現する根拠を探り当てようとしたのだと、私は思います。

しかし、ガンディーのこのような思想と生き方は、まだまだ世の人々に理解されているとはいえないでしょう。

ある意味では、ガンディーもガンディーの非暴力の思想も、いまだに孤独のままに置かれているといえるかもしれません。

しかし私は、もし今後人類が生き残ることができるのであれば、それはガンディーのこのような思想を媒介にしてこそ初めて可能になるのだらうと思っていますのであります。

第5章 ガンディーと「母なるもの」

「お前の母親になつてはいけなにかね？」

本書の「プロローグ」でも少し触れましたが、ガンディーの妻・カストルバーイは、亡くなる前に「私が死んだあと、マヌーベン（ガンディー夫妻が引き取って育てていた姪）の母親代わりをしてほしい」という遺言を、夫に遺言しました。

この妻の遺言は、晩年のガンディーに決定的といってよい役割を与えることになりました。彼が最後の挑戦として取り組んだ「自らの男性性の乗り越え」というテーマと向き合う、直接の契機となったからです。

カストルバーイはなぜ、「父親代わり」ではなく「母親代わり」となることをガンディーに望んだのでしょうか？ その真意はいまとなつてはわかりませんが、ガンディーはこの遺言をあたかも「天啓」のように受け止め、本気で姪の「母親代わり」になろうと努めていきます。インド独立後、ガンディーは姪のマヌーベン（以下「マヌ」と略）を手元に置いて教育を始めましたが、

その教育はまさに、母親が娘に対して行なうようなものだったのです。

マヌはのちに、『バプー、マイ・マザー』なる回想記を出版し、ガンディーに引き取られた自分がどのように教育されたかを振り返っています。

「バプー」は「父親」を意味するヒンディー語で、日本語にするなら「おとつあん」というニュアンスでしょうか。つまり、親愛の情を込めて父親を呼ぶ言葉であり、生前のガンディーは親しい支持者たちから敬意を込めてそう呼ばれていました。

ガンディーはのちに、インド政府から正式に「インドの国父」という公称を付されています。「バプー」という愛称が父を意味するように、一般的にガンディーには「父親」のイメージが強いわけです。

ところが、マヌはそのイメージに反して、ガンディーは自分にとっては母親以外の何ものでもなかったと、『バプー、マイ・マザー』という書名で宣言しているわけです。

同書の表紙には、ガンディーがマヌに対して言ったという、次のような言葉が掲げられています。

「私はお前の母親になってはいけなにかね？　多くの人々にとって、私は父親だったが、お前に対してだけは母親なんだよ」

本章では、この『バプー、マイ・マザー』の内容をふまえ、父ではなく「母になろうとした」ガンディーの挑戦とその意義について、考えてみたいと思います。

非暴力の最終段階としての「母性の獲得」

ガンディーは、「暴力志向や権力欲、性欲は男性のもので、女性にはない」という、非常に単純化された女性崇拜意識をもっていました。女性は古き佳きインドの精神を体現している。男たちは女性を見習って生きなければならぬとも、彼は主張しています。

しかし、ガンディーのこうした女性賛美が過度に理想化された非現実的なものであることは、少し考えればわかります。女性にも性欲があるのはあたりまえですし、女性の中にも暴力志向も権力欲もあります。西太后やメアリー一世（イングランド女王）など、歴史上の女性権力者には多くの暴力的エピソードがありますし、一般女性によるドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）の事件も、昨今ではけっして少なくないのです。

今日、ガンディーの女性観に対しては、フェミニズムの立場からの批判がしばしば見られます。というのも、彼の女性賛美は、エドワード・サイードが批判した「オリエンタリズム」（東洋を異質なものとして規定する西洋の姿勢）と同じ構図を生んでいるからです。

「オリエンタリズム」は元々は美術用語で、西洋にはない東洋独特の美や文化を賛美する言葉でした。この意味での「オリエンタリズム」は、「東方趣味」「東洋志向」などと訳されます。

しかし、パレスチナ出身の米国の批評家であるサイードは、一九七五年の著書『オリエンタリ

ズム』の中で、東洋賛美であるオリエンタリズムが、西洋列強が東洋の国々を植民地化する際の「支配の論理」にもなっていたと喝破しました。「東洋の文化は我々西欧のそれとは違う。彼らは異質だ」という考え方が、人種主義的、帝国主義的な思考様式に結びつき、それが植民地支配を正当化する論理を強化してしまった、という見方です。

ガンディーの女性賛美にも、それとよく似た側面があります。

「女性は素晴らしい。男たちよ、女性を見習え」とガンディーが女性を賛美すればするほど、「女性性は男性とは異質な存在だ」という認識につながり、近代的な男女平等の理念からは遠ざかります。そのことがけつきよくは、「男性が女性を支配する構造」の固定化につながってしまうというのが、フェミニニズムの側から投げかけられたガンディー批判でした。これは検討に値する、また、ガンディーについて考える際には避けて通れない批判といえるでしょう。

ガンディーのあまりに単純化された女性崇拜は、おそらくは彼が自身の母親を理想化していたことと関係があるのでしょう。本書ですでに述べたとおり、ガンディーは人格形成において、父親よりも母親から圧倒的な影響を受けていました。そして、彼の心の中の母親像は、神格化に近いほど理想化されていたのです。母を慕い、理想化するあまり、彼は女性全般に対しても巧まざる理想化を行っていたのではないのでしょうか。

ただ、ガンディーの女性観がフェミニニズムの視点から問題を生んだものであるとしても、「産み育てる性」である女性が、それゆえに男性よりも暴力や戦争を嫌悪する傾向をもっていることは、

まぎれもない事実です。たとえば、「戦争ごっこ」など、遊びの中に「戦い」を取り入れるのは一般に男児であり、女児の遊びは平和的なものが大半なのです。

生涯をかけて非暴力思想を追求したガンディーが、暴力を嫌悪し、平和を志向する女性の一般の傾向に「人類の希望」を見出したとしても、不思議ではありません。

おそらくガンディーの心の中には、男女の差が暴力的なものと非暴力的なものとの差に対応しているという直覚のようなものがあつたのではないでしょう。政治的暴力や社会的暴力は、「男性性」に由来する……そんな認識があつたからこそ、暴力から真に自由になるためには、男性そのもの乗り越える以外に道はない、とガンディーは考えていたのでしょうか。

つまり、ガンディーによる非暴力の追求のいわば「最終段階」が、自らの心の中に「母性を獲得しよう」とする欲求を生んだのではないのでしょうか。

ガンディーは三七歳のとき、南アフリカの地でブラフマチャリア（禁欲）の誓いを立てました。それは、自分の中の「男性的性欲」の否定であり、「性的存在としての男性」を乗り越えようとする試みでした。しかし、「母性の獲得」までを目指したものではありません。

その後、インドで長年にわたって非暴力抵抗運動をつづけるなかで、男性がもつ闘争本能の発露ともいえるインド民衆の暴力事件（チャウリ・チャウラで起きた警官襲撃事件など）にくり返し悩まされ、ガンディーは「男性的なるもの」につくづく愛想が尽きたのではないのでしょうか。言いかえれば、「世の男たちが自らの男性性がもつ罪深さに気づかないかぎり、この世界に平和

は訪れない」と痛感したのではないのでしょうか。

自分の中の「男性性」といかに対峙し、これを消し去るべきか？ そのことをずっと模索してきたガンディーにとって、「私が死んだあと、マヌの母親になつてほしい」という妻の遺言は、進むべき道に向かつて彼の背中を押すような作用を果たしたのでしよう。

ガンディーはそのとき、「非暴力の最終段階が、『母性の獲得』である。そこまで行き着かなければ、私にとっての非暴力思想は完成しない」と直観したのではないかと思えます。妻の遺言は、ガンディーにとってまさに「天啓」となったのです。

一人の「母」として、娘・マヌを育てる

マヌは一二歳で実の母を喪い、以後はガンディーの妻カストルバーイを母代わりにして育ちました。そのおかげで「実母のいないさびしさはまったく感じることがありませんでした」と、手記で述べています。また、マヌはガンディーとカストルバーイの二人に対して、「神様に対するのと同じくらいの尊崇の気持ちを幼いころから抱いてきた」とも述べています。

カストルバーイは、一九四四年二月、夫ガンディーとともにアガ・カーン宮殿（一九世紀に建てられた灌漑な宮殿だが、ガンディーらを軟禁する獄として使われていた）の獄中にあつたとき、そこで病死します。マヌはそのとき、カストルバーイの世話係としてともに入獄していました。

母代わりだったカストルバーイを喪い、悲しみにくれるマヌに、ガンディーは慰めの手紙をしたためます。そこには早くも、「私は本当のところ、お前の母親じゃないかね？ これだけわかってくれれば、それで十分だ」との一文があります。自分が母代わりになってお前を育てるとの宣言ともとれるでしょう。

そして、ガンディーはアガ・カーン宮殿から解放されると、以後マヌをそばに置いて「教育」を始めました。それは、マヌの手記によれば次のようなものでした。

「バプーは一人の母親が一四、五歳の自分の娘を育てると同じように私を育て始めました。この年頃の娘なら、幼いころよりも母親と一緒にいたいと思うものです。そのため、バプーは私を身近に置き、食事、衣服、体調、外出、友人、勉強、毎週髪をきれいに洗っているかなど、私の生活の細部についてまで気を使うようになりました。これは、彼の死の日までつづきました」

ガンディーのアドバイスがどれほど細かいことにまで及んでいたか、象徴的な例を挙げます。あるとき、マヌが着たサリー（インドの女性用民族衣装）の端が頭からずり落ちていたのを見て、ガンディーはこう言ったそうです。

「グジャラート風のサリーは、手持ち無沙汰で、ソファアーに身をまかせたり、車を乗り回す裕福な婦人の着物なのだよ。頭部を覆っていないと、正視できないほど下品に見える

このサリーを身に着けるとときには、バー（カストルバーイの愛称）やほかの年配のご婦人と同じように、頭からずり落ちないように常に気を使っていないといけない。サリーがずり落ちたら、

すぐに直そうね……私がお前のお母さんになったからには、こういったことも言わないといけないのだよ。わかるね？」

そして、サリーの着方についての細かな注意から、ガンディーの話はどんどん脱線し、「インドの未来に女性たちが果たす役割」についての持論を展開していくのでした。

「我が国に自治とよき統治をもたらすことができる者がいるとすれば、それは我が国の女性たちである、私は公言してはばからない。主婦のいない家が家庭でないのと同様に、女性の協力がなければ、我が国の独立も不完全なものとなる。しかしその協力も、女性たちが清浄な境地に達して初めて可能となるのだ」

ガンディーが女性たちにかに大きな期待をかけていたかが、よくわかる言葉です。そして、彼がマヌに期待していたのが、一人の家庭的な女性となるのではなく、インドの未来を担うような女性になることであつたことも、この言葉から読み取れるでしょう。

ガンディーはマヌに毎日日記を書かせ、その内容を必ずチェックしては、「読んだ」という意味の署名をしました。また、毎日少なくとも一〇分間は、ヒンドゥー教の重要な聖典の一つである『バガヴァッド・ギーター』（叙事詩『マハーバーラタ』の一部で、サンスクリットで書かれた詩編）の学習に充てられたといえます。

軟禁されていたアガ・カーン宮殿における日々では、ガンディーはマヌの家庭教師の役割も果たし、算術・代数・幾何学・地理・歴史・科学・サンスクリット語などを教えたそうです。

こと細かな「しつけ」から学問、宗教的教育に至るまで、ガンディーは生活のすべてにわたって、マヌを一人の娘として教育していったのでした。

すべての贅沢を禁じ、献身の心を教える

ガンディーは、自分の弟子たちが心清らかな奉仕者・献身者であることを求めました。その要求はときに苛烈なほどで、妻であるよりもまず同志であることを求められたカストルバーイなどは、ずいぶん泣かされています。

たとえば、アシユラムで不可触民たちと共に暮らし始めたころ、ガンディーはカストルバーイにアシユラムのトイレの汚物を捨てる役割を命じました。

インドのカースト制度の中にあつてはそのような役割は不可触民によつて担われてきたため、カストルバーイは当初泣いて拒みました。しかし、ガンディーはけつして許さず、そればかりか、妻がいよいよやながら汚物を処理するのではなく、「喜びながら行なう」ことまで要求したのです。マヌに対しての教育にも、同じような厳しさがつねにありました。ガンディーはマヌに、つねづねこう言っていたそうです。

「奉仕は清らかなものだ。恐れや利己心から奉仕をしても、それは奉仕にはならない。

一切を神に捧げる境地に利己心が入り込む余地はない。その心で奉仕を行なう人は、日々力を

増すのだよ。日々の糧を得る仕事も、奉仕の一分である。奉仕に身を捧げた人は、微笑みとか、ちよつとした戯れのようなささやかな振り舞い一つによつても、奉仕を行なうことができる。その人の行為は、こうした意味で純粹だ。神はこのような献身者たちにあらゆる必要な力を与えてくれるのだよ」

マヌはガンディーの日々の仕事を手伝う秘書の役割も務めていましたが、その仕事もまた、奉仕と献身の心をもつて教える教育でした。

一九四七年三月、ガンディーが最後のインド総督となったマウントバッテン卿と会談するためデリーまで旅したときの、印象的なエピソードがあります。

「インド総督用の飛行機を使つてはどうか」という申し出を、ガンディーは「インドの貧しい大衆が乗れないような輸送手段を使うことはできません」とことわりました。「それでは、電車の特別車両を用意させましょう」と政府側は重ねて言いましたが、ガンディーはそれもことわり、普通列車で丸一日かけてデリーに向かうことにしました。その旅の唯一の同行者が、マヌだったのです。

ガンディーはマヌに、「荷物は最小限度にし、いちばん小さな三等車両のシングル・コンパートメント（車両を横に区切った一画）にしなさい」と指示しました。しかし、マヌは「シングル・コンパートメントでは、バプーがゆつくり休めない」と考え、あえてダブル・コンパートメントを予約しました。そして、自分の荷物はそのうち一つのコンパートメントに置き、ガンディーが

仕事をするスペースを空けようとしたのです。

しかし、ガンディーがそのことを知ると、彼はマヌを厳しく叱ったのでした。

「お前がコンパートメントを一つ余分に頼んだことが、愛情の発露であることはよくわかる。だが、それは盲目の愛情というものだよ。政府が私のために特別列車を用意しようとしたとき、私がことわったことは知っているだろう？ それは、私のために特別列車を走らせたら、そのためにほかのたくさんの列車が運休し、よけいな経費もかかるからだよ。コンパートメントを余分に頼むのは、特別列車を走らせることと、本質的には同じことだ。私はお前に、もつと高い志をもつことを教えたなのだ」

そして、列車が次の駅に停車したとき、ガンディーはその駅の駅長に「余分なコンパートメントを解約し、それを別の乗客に使ってもらうように」と依頼したのでした。

ガンディーにとつては、これもまた「非暴力の徹底」につながる行為でした。自分に与えられた特権を享受し、贅沢をすることは、それがほかの誰かの権利を奪うという意味で、一つの「暴力」にほかならない——それがガンディーの考え方だったのでした。

マヌの「母親」役となったガンディーは、日々の仕事を通して、彼女に「すべての贅沢を禁じ、献身の心を教える」厳格な教育を施していったのでした。

マヌの手記『パプー、マイ・マザー』から、もう一つ、印象的なエピソードを紹介しましょう。

それはガンディーが、東ベンガル州ノアカリ地区（現バングラデシュ）の村から村を行脚し、

ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の紛争の調停をして回ったときのことです。

マヌを伴つてのその困難な旅の途中、二人はある貧しい織工の家に泊まりました。そしてそのとき、マヌはガンディーがいつも使っている石鹼代わりの石（表面がザラザ石で、入浴時に体をこすつて洗う）を、そこに忘れてきてしまったのです。気づいたのは、次の滞在先で彼女が入浴の準備をしていたときでした。

「昨夜泊まった家に、入浴用の石を忘れてきてしまったようです。どうしたらいいでしょう？」
マヌがそう尋ねると、ガンディーは少し考えてから言いました。

「しくじつてしまつたね。いまから、昨夜泊まった家に一人で捜しに行きなさい。お前が二度とミスを犯さないようにするためには、それしかないよ」

ノアカリ地区はココナツと檳榔樹の森が深く、周囲の地理に明るくなければすぐに迷子になるような場所でした。しかも、宗教紛争の真つ最中です。人通りのない道中には、イスラム教徒の家が点在するばかり。一〇代の少女が一人で行くのは、あまりに危険な道のみでした。ガンディーはそのことを重々承知のうえで、あえてマヌを一人で行かせたのです。

途中でならず者に襲われたらどうしよう、と心配しつつ、マヌはラーマの神（インドの古代叙事詩『ラーマヤナ』の主人公で、神の化身。とくに、ガンディーが属したヴィシュヌ派においては篤い信仰の対象となる）の名を心に唱えながら、土の上に残っている自分たちの足跡だけを頼りに、来た道を戻りました。ようやく目指す家にたどり着き、石を捜し当てたときには、四時

間近くが過ぎていました。それから元の村に戻り、ガンディーに石を渡したとき、マヌは思わず泣き伏してしまつたそうです。

その様子を見て、ガンディーは次のように言つたのでした。

「今日、お前は試練を受けていたんだよ。神様がなさることは、すべて私たちのためなんだ。お前が初めて私のところに来たとき、注意し、説明したじゃないか。『私と一緒に献身の修行をするためには、勇気が必要だ』と……。少しでもたじろげば、挫折したとみなされる。

この石のおかげで、こんなにも早く最初の試練がきて、お前はそれに耐えたのだよ。私がそのことをどれほどうれしく思っているか、お前にはわからないだろう」

ガンディーとともに暮らした日々は、マヌにとっては厳しい「献身の修行」でもあつたのです。

「禁欲の実験」を、どう捉えるべきか？

マヌとガンディーの深い絆について論ずる本章においては、ガンディーが晩年に行なつた「ブラフマチャリア（禁欲）の実験」について触れないわけにはいきません。

晩年のガンディーは、複数の若い女性たちと裸で同衾するという型破りな「禁欲実験」を、くり返し行なつていました。このことは、ガンディー自身が機関誌で明かしているまぎれもない事実です。ただし、一般的な「聖者ガンディー」のイメージにそぐわないあまりに衝撃的な事実で

あるためか、大半のガンディー伝が完全に無視しています。

真正面からこれに触れている例外的な書物として、米国の心理学者エリクソンの『ガンディーの真理』、インド人ジャーナリストであるヴェド・メータの『ガンディーと使徒たち——「偉大なる魂」の神話と真実』、一時期はガンディーの弟子でもあり、通訳としてガンディーと行動を共にした大学講師ニルマル・クマール・ボースの『ガンディーとの日々』などがあります。

これらのうち、ガンディーの「禁欲実験」を実際に目撃したうえで文章に記しているのが、ボースの本です。

ボースは自分が目の当たりにした「禁欲実験」に衝撃を受け、そのことについてガンディー自身に問いただしてもいます。そして、けっきよくはそのことが原因でガンディーのもとを去ったのです。

ボースが去ってから、ガンディーが彼に宛てて書いた手紙の一節が、彼の著作に引用されています。

「私にとっては女性に触れぬことがブラフマチャリアなのではない。今していることは私には新しいことではない。……実験の前提に女性の劣等性があるとお考えになるとは驚かざるを得ない。もし私が色情を持ちあるいは相手の同意なく女性を見れば、そのとき女性は劣等者であろう。私の妻は私の欲望の対象だったとき、劣等者であった。私の隣に裸で妹として寝るようになってからは、彼女はもはや劣等者ではなかった。かつてのように妻ではなく他の妹であっても同じこ

とではないか。隣に裸で寝る女性に対して私がみだらなことを考えるなどと思わないでいただきたい」

「女性の劣等性」云々とは、ボースがこの「禁欲実験」について、「一種の無意識の搾取さくしゆ」であり、「実験に使われる女性はある意味で劣等者として扱われる」と批判したことを指しています。この「実験」の相手となった女性は時期によって異なりますが、女医スシラ、もう一人の姪であるアバ、そしてママの名が挙げられています。

三七歳で妻との性的交渉を絶つてから、ガンディーは禁欲をつづけてきました。それは始めた当初は「剣の刃をわたるような」苦行であつたと、彼は述べています。

七〇代後半の晩年になってからは「苦行」ではなかつたでしょうが、それでも彼は、自分が本当にブラフマチャリアを保っているかどうか、つねに不安の種だつたのではないのでしょうか。それは、自分が性欲の慮とらとなつていたばかりに父の死に目に会えなかつたという、若き日の恥辱じよくの記憶がトラウマとなつていたせいでもあるでしょう。

だからこそ、たとえ周囲から非難されようとも、裸の若い女性と同衾して「自分がほんのわずかでも性欲を感じないか」を、試さずにはいられなかつたのです。

ヴェド・メータの『ガンディーと使徒たち』から、ガンディーがこの「禁欲実験」について語つた言葉を引用します。

「わたしにとってブラフマチャリアの意味はこうである。つねに神を思っていれば、裸の女性

と一緒に寝ていても、その女性がどれほど美しくても、性的に興奮することはない。たとえば、クリシュナ神に衣をはぎ取られたとき、娘たちは恥ずかしがらず、性を意識することもなく恍惚となり、献身的に神の前に立っていた。

たとえ全世界が、わたしを見捨てようとも、わたしは自分が真理とみなすところから離れない。これは妄想か、畏かもしれない。たとえそうであっても、わたしは自分でそれを確かめなければならぬ」

そして、マヌを相手とした「禁欲実験」には、もう一つの意味が加わります。それは、「自分がほんとうに性欲を断ち切ることができているか？」を確かめる実験であるとともに、「自分はほんとうに母親になることができるだろうか？」を確かめる実験でもあったのです。

母親であるなら、裸の娘を抱きしめ、愛撫したとしても、そこに性的な意味が加わることはありません。裸のマヌを抱きしめることで、ガンディーは自分が「内なる男性」を乗り越え、母性を獲得することができたのか——すなわち、非暴力の最終段階へと到達できたのかを、己が心くり返し問うていたのではないのでしょうか。

ガンディーが「禁欲実験」について機関誌で明かしてから、マヌはくり返し、その「実験」について人から訊かれるという「試練」に遭うことになりました。彼女はそのたびに、質問者にこう問い返したそうです。

「お母さんと一緒に寝るのが、どうしていけないの？」

と……。

晩年のガンディーが行なった「禁欲実験」について、いまの私たちの常識やモラルによって軽々しく裁断することは、慎むべきでしょう。ガンディーがくり返した「公的断食」の価値が常識では推し量れないように、それはやはり常識の外側にある行為といえます。

そして、少なくともマヌに関するかぎり、彼女はガンディーの「実験」のパートナーとなったことについて、ボースの言う「劣等者として扱われる」屈辱など、微塵も感じてはいなかったようです。マヌの手記は「禁欲実験」について触れてはいませんが、手記にはガンディーへの畏敬と愛情だけが横溢おちいつしているからです。

ガンディーの最晩年を見届けたマヌ

晩年のガンディーを写した写真には、マヌともう一人の姪・アバが、両脇からガンディーの体を支えるようにしているものが少なくありません。年老いて足腰も弱り、歩行もやや困難になったガンディーは、しばしばそのような姿で公の場に現れました。彼は二人の姪について、冗談まじりに「私の松葉杖」と呼んだものです。

一九四八年一月三〇日に暗殺されたその日にも、ガンディーはやはり、マヌとアバに両脇を支えられて登場したのです。

つまり、マヌという女性は、ガンディーの最晩年の姿を、誰よりも身近にあつて見届けた人でもあるのです。

父と子ならぬ「母と子」として、ガンディーと深い絆で結ばれた彼女は、その最後の日々の印象的な場面を数多く記録しています。

たとえば、マヌの手記には、暗殺のちょうど一年前（一九四七年一月三〇日）にガンディーが病に苦しむ女性への激励の手紙に記したという、次のような言葉が書きとめられています。

「全世界で唯一の万能薬があるとすれば、それはラーマの神様の名前です。しかし、神様に関する決まりを堅く守らなければ、効き目はありません。それなのに、いったい誰がその決まりを守ろうとしているでしょうか？」

ガンディーは病氣になつても「神の名さえ唱えていれば、それが最高の妙薬なのです」と、近代的な薬品の投与を拒むことがしばしばあったと言われます。信仰によつてあらゆる病は癒せるというその確信は、ガンディーが生涯つらぬき通したものでしたのです。

そして、暗殺のちょうど一年前に書かれたこの手紙の言葉は、凶弾に倒れたときに彼が口にした最期の言葉が「ヘー、ラーマ（おお、神よ）」であつたことを思えば、その符合に肅然とせざるを得ません。

また、これはマヌの手記にある言葉ではありませんが、暗殺の前夜——一九四八年一月二九日の夜に、ガンディーはマヌに対してこう語りかけたと言われています。

「もしも私が普通の病気で死ぬようなことがあつたなら、お前は屋根にのぼつて『ガンディーはニセのマハトマだった！』と叫ばなくてはならないよ。そうすることで世間のみんがお前を罵ののつたとしても、そうしておくれ。そうすれば、私の魂はどこにいても安らかに眠ることができらるだろう。

だが、この間一人の青年が私に爆弾を投げつけたように（暗殺の一〇日ほど前、集會場で起きた事件。爆弾はガンディーの数メートル手前で炸裂ざくれつした）、誰かが私に向かつて銃を撃つたなら、そしてそのとき、私がうめき声さえ立てずに胸に銃弾を受け止め、『ラーマ』の御名を唱えることができたなら、そのときこそ、『ガンディーは本物のマハトマだった』とみなに言つておくれ。そうすることが、インドの民衆に喜びをもたらすのだから……」

ガンディー暗殺は政治的事件であつたわけですが、彼自身にとつては覚悟の上の「殉教じゆんきやう」だつたのです。

マヌの手記では、最晩年のガンディーがすでに死を覚悟したうえで泰然と振る舞う様子がつぶさに記されており、感動を呼びます。たとえば――。

インド独立の日、ガンディーはカルカッタ（現コルカタ）にいました。

インドとパキスタンが分離独立したことで、カルカッタは「国境の町」となり、ガンディーにとつてはどこよりも危険な町でした。分離独立に最後まで反対していたガンディーはイスラム教

徒にとつて敵であり、一部のヒンドゥー教徒からも「ヒンドゥー教徒のくせにイスラムをひいきする許しがたい男」とみなされていたからです。しかも、カルカッタでは独立の一年前に暴動が起こり、多数のヒンドゥー教徒が殺されていました。

そんな危険な町に、しかも分離独立直前の最も危険な時期から、ガンディーはあえてマヌたちを連れて赴いたのでした。

そして案の定、カルカッタではヒンドゥー教徒の青年たちがガンディーに近寄つてきて、「お前はヒンドゥー教徒の敵だ」と血走つた眼で言うという「事件」が起きます。しかしそのとき、ガンディーは次のように言つたのでした。

「私は君たちの助けを借りたい。一人では何もできないから。私を守るのも殺すのも君たちしだいです。殺されたつて、私は構わない。老人だし、長生きしたくもない。これまで十分に尽くしてきました。ここへきた唯一の理由は、みんなと話をして、冷静になつてもらふことです。私はヒンドゥー教徒とイスラム教徒のしもべです。すべての宗教は、私にとつては同じものです」

翌年にガンディーを殺したのは狂信的ヒンドゥー教徒の青年でしたから、「私を守るのも殺すのも君たちしだいです」という言葉は、一つの予兆だったととらえることもできます。ただし、このときの青年たちはガンディーの言葉によつて冷静になり、ガンディーのメッセージをほかのヒンドゥー教徒たちに伝える役割を買つて出てくれたのでした。

そして、独立後に血なまぐさい宗教衝突が起こることが懸念されていたカルカッタの町で、ガ

ンディーを中心とした友好の輪が広がっていきました。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が同じトラックに乗ってガンディーのもとに駆けつけ、「ヒンドゥーとムスリム（イスラム教徒）は兄弟だ！」と歓声を上げて独立を祝ったのです。

最晩年のガンディーは、ヒンドゥーという一つの宗教を超越ちようえつした「聖者」となっていたのです。インド独立の日、ガンディーがマヌたち同行者に断食を求めたという、印象的なエピソードも紹介されています。

「バプー、今日くらいは甘いものでもくださらないのですか？」
マヌがそう問うと、ガンディーは次のように答えたそうです。

「結婚、誕生、葬儀、そしてとくにめでたいときにこそ断食をするようにお願いしていることは、お前も知っているだろう。それに、今日から私たちは重い責任を担うことになるのだ。今日は断食をして、私たちの責務をいっそう自覚すべきだよ」

このように、「聖者」となったガンディーの最晩年の姿を見届けたマヌは、やはりガンディーとこよなく深い絆で結ばれていたのでしょう。

一〇代後半の多感な日々をガンディーと一体不二となって過ごしたマヌは、四〇代の若さで世を去っています。彼女自身は、もちろん、世界史年表に大書されるような人ではありません。ガンディーの評伝以外で名前を見ることもほとんどないでしょう。しかし、ガンディーの人生最後の挑戦であった「母になる」という試みを支えた女性として、彼女もまた「歴史を動かした」の

です。

そして、男たちが主導したことで「革命と戦争の世紀」と化してしまった二〇世紀を乗り越え、女性たちが社会の最前線でいきいきと活躍する二一世紀を迎えたいま、自らの男性性を乗り越えようとしたガンディーの試みは、いやまして大きな意味をもっているといえるでしょう。

エピソード　ガンディーをいかに受け継ぐべきか

ガンディーの言動は「手本」にはならない

本書の中で私はくり返し、「ガンディーという人物は、私たちにとってわかりにくい存在だ」と述べてきました。その「わかりにくさ」の一つの要因として、ガンディーが「手本にしにくい存在である」ということが挙げられると思います。

人は生きていくうえで、意識するとせざるにかかわらず、自らの手本となる「ロールモデル」を求めます。たとえば企業経営者なら、「経営の神様」と呼ばれた松下幸之助を筆頭に、たくさんのロールモデルがいます。世の経営者たちはそのロールモデルの言行を記した書物などを読み、そこに手本を求めようとします。

しかし、ガンディーはそのような手本にはなりにくい存在です。

二〇世紀後半から現在に至るまで、「世界の偉人一〇人を選ぶ」などという国際的アンケート調査を行なうと、必ずガンディーが上位に入ります。にもかかわらず、「私はガンディーのようになりたい」とか、「ガンディーを手本にして生きてきました」という人には、ほとんどお目に

かかりません。ロールモデルになりにくいのです。

たとえば、ガンディーを尊敬する二一世紀の社会運動家が、運動の中で何かの暗礁に乗り上げたとします。そのとき、彼はガンディーを手本に、断食することによって苦境を突破しようとするでしょうか？あるいは、政府の横暴を広く知らしめるために、「塩の行進」のような大パフォーマンスを試みるでしょうか？明らかに「否」でしょう。そんなアイデアは冗談にしかありません。

ガンディーが断食によって数々の政治的成果をあげたことも、「塩の行進」が非暴力闘争の稀有な成功例として歴史に刻まれたことも、ガンディーにしか成し得ない一回かぎりの偉業であり、後世の誰かが再現することは不可能です。科学の用語を用いるなら、「再現可能性がない」のです。また、ガンディーが「つらぬいた徹底した禁欲も、二一世紀の我々が直接手本とすることはできません」。

ゆえに、ガンディーの言動を手本とすることはむしろかしい。というより、ほとんど不可能と断言していいでしょう。

しかし、ガンディーの精神を受け継ぎ、それぞれの活動にその精神を根づかせることならできないことはないでしょう。そのような形の「後継者」なら、たくさん挙げられると思います。

逆に言えば、ガンディーは誰か一人の後継者が出てそのすべてを受け継げるような、そういう存在ではない、ということなのです。

私はかつて、『教えること、裏切られること——師弟関係の本質』（講談社現代新書）という著書をものしました。一章ごとに歴史上の一組の師弟を取り上げ、そこから「師弟関係の本質」を論じた本です。

同書の中で、私はユダとペテロの違いを考察しています。イエス・キリストの弟子であることに「成功」したペテロと、「失敗」して裏切り者になってしまったユダ——。ペテロは、集団によって「師の精神の分割相続」をする決断をしたことによって、後継者たり得たのだ、というのが私の見立てです。

つまり、師の存在があまりに巨大すぎる場合、その精神は一人の後継者によって「単独相続」できず、弟子たちが「分割相続」せざるを得ないのです。

イエスには十二使徒がおり、釈迦には十大弟子がいました。また、孔子には「孔門十哲」、松尾芭蕉には「蕉門十哲」と呼ばれた十大弟子がいました。言いかえれば、彼らは「一人だけで師の後継者たるには、荷が重すぎる存在」であつたわけです。

私は、ガンディーについても同じことが言えると思います。

後継者はネルーか？

「ガンディーの後継者」といえば、多くの人がまず思い浮かべるのは、独立インドの初代首相

となつたジャワハルラール・ネルーでしょう。

ほかならぬガンディーが、国民会議派の自らの後継者として指名したのがネルーでした。インド独立運動の過程においてガンディーに影のように付き従い、ガンディー以上に長い日数を獄中で暮らしたのもネルーです。

それでも、私はネルー一人をガンディーの後継者と見なすことにためらいを覚えます。ネルーはたしかに、ガンディーのある側面を受け継ぎました。しかし、ガンディーのすべてを受け継いだ存在とはけつして言えません。

本書ですでに述べたとおり、ネルーは独立闘争の過程で、ガンディーを真正面から批判したことが一度ならずあります。そのことが示すとおり、愛弟子ネルーにとつてさえ、ガンディーには理解不能な一面、相容れない一面があつたのです。

富裕なバラモン階級の家に生まれ、英国の名門ハロー校からケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに学ぶなど、ネルーはインドにおける輝かしいエリート階級の出身者です。そして、彼はそのエリートとしての出自から、最後まで完全に自由にはなれなかつたのだと思います。すなわち、ガンディーがそうしたように、貧しく、虐げられたインドの民衆に同化し、彼らと「同苦」することは、ネルーにはできなかつたのです。

それは、私が勝手な当て推量で言っているわけではありません。ネルー自身が、自伝の中でそのことを赤裸々に告白しているのです。

ネルーは独立闘争の過程で、インドの僻地の農村にくり返し入り、農民たちと交流を深めました。彼はその交流から大きな感動を得るのですが、その一方で、自分と農民たちとは、あらゆる面でまったく違っているという認識を持ちつづけたのです。

また、ネルーは「大衆というものはつねに移り気だ」という考えを捨てられず、ガンディーのように徹底してインドの民衆側に立ちつづけることはできなかったのです。ネルーはそのことで、ガンディーに対して複雑なコンプレックスを抱きつづけました。

さらに、ガンディーにとつて行動の最大の基準は「内なる神の声」でしたが、ネルーはそこまです宗教的になることはできませんでした。むしろ、ガンディーが政治闘争の中に宗教的信念を持ち込むことに、ネルーはくり返し非難の声を上げたのです。

要するに、ネルーはガンディーの政治家ないし革命家としての側面は受け継いだものの、宗教的側面や、民衆と完全に同化する能力については、十分に受け継いだとは言えなかったのです。彼はガンディーのよき弟子ではあっても、「ガンディーになりきることは」はけっしてできませんでした。

言いかえれば、ガンディーという人物はあまりに多面的で巨大であったため、一人の弟子がすべてを受け継ぐことは不可能で、「師の精神の分割相続」をするしかなかったのです。そういう点でネルーは、ガンディーの精神の最大の「分割相続者」ではあったと言えるでしょう。ネルーは、ガンディーが暗殺されてから三日後、国会で追悼演説を行ないました。その一節を、以下に

引いてみましょう。

「栄光は去った。わたしたちの生命をあたたため、輝かしてくれた日は沈み、わたしたちは寒さと闇の中にふるえている。しかしかれはわたしたちに、このような思いをさせようとは考えなかつたであろう。ともあれ、わたしたちがこの永い年月、ふり仰いできた栄光、そして神聖な火を身につけた人は、わたしたち自身をも変えてきた。いわば、わたしたちはこれらの年月を通じて、かれによって型を与えられてきたのであった」（『ネール 人間・思想・政策』坂本徳松訳より）

この演説の中でネールは一貫して、「わたしたち」という複数形を用いています。地上から去つたガンディーの衣鉢いぼつを継ぎ、歩んでいかなければならないのは私一人ではなく、「わたしたち」なのだ——私一人が後継者たるには、ガンディーはあまりに巨大すぎるのだという思いが、そこには透けて見えるようです。

ガンディーとネールの師弟関係に学ぶべきもの

前項で、「ガンディーとネールには相容れない部分も多々あった」「ネールはガンディーのすべてを受け継いだわけではない」と述べました。

しかしだからといって、私はネールがガンディーに対して果たした役割を軽んじているわけはありません。それどころか、ガンディーとネールの関係は、ある意味で「理想的な師弟関係」

であつたとすら考えているのです。

ガンディーは、かりに暗殺されなかつたとしても、独立後のインド政府で自分が重要な役職に就くことなど一切考えていなかつたと思います。それは自分の果たすべき役割ではないと、彼はよく知つていた。だからこそ、その役割はネルーにすべて託したのです。

独立間もないインドを統治していける器の大きさと高い知性を併せ持ったリーダーは、ネルーを置いてほかにはいない。ガンディーはそのことを理解していました。だからこそ、自分と相容れない部分をもつているどころか、ある意味では対極に位置する存在ですらあるネルーに対して、全幅の信頼を置いたわけです。

大企業のワンマン社長が、自分の言うことを聞く「イエスマン」ばかりを周囲に揃え、そのことによつて企業が衰退していくというケースが、よくあります。人はとかく、自分に似たタイプ、自分の言うことを聞く御しやすいタイプの人間を部下にしたがるものです。

ところが、ガンディーはそうではなかつた。自分と相容れない面をもち、時には自分に対して厳しい批判の言葉をぶつけてくるネルーを、最も重用し、身近に接したのです。それは彼が完全に私情を捨て去り、一心にインドの未来を考えていたからこそです。

私はそこに、ガンディーの底知れぬ寛容さと優れたリーダーシップを感じます。自分とまったくタイプの異なるネルーという人間を完全に包み込み、自分を尊敬させてしまうというのは、並の人間にはできない離れ業だと思ふのです。

そして、ネルーの側も、ガンディーという師匠に巡り会ったからこそ、私情を完全に捨て去り、インドの未来のためにすべてをなげうつことができたのです。

大金持ちだったネルーは、自らの私有財産をすべて放擲して、ガンディーの非暴力運動の資金として献上しました。そのことによって、いわばネルーは歴史を変える偉人としての一步を踏み出したのです。

要するに、ガンディーとネルーの師弟関係は、互いの足りない部分を補い合うとともに、互いに触発し、高め合つていくという関係でした。ガンディーとネルーの師弟がともに闘ったからこそ、一プラス一が一〇にも一〇〇にもなるような“化学反応”が生じ、互いの力が倍加されて発揮できたのです。私はそうした関係こそ、真の師弟関係だと思っています。

二一世紀のいまにおいては、「師弟」という言葉自体がどこか前近代的で古めかしい、と感じる向きもあるでしょう。しかし私は、時代がどう変わろうと、真の師弟関係というものは歴史を変える原動力となり得るものだと思います。

人間の一生など、長生きしてもせいぜい一〇〇年足らず。歴史の長さから見れば、ほんの一瞬間のようなものです。その短い間にひとかどの仕事を成し遂げた人間は、必ず「師」に相当する人間的な影響を受けているものです。人は、師に当たる存在があつてこそ、短い人生の中で自分の力を最大限に発揮し、大業を成し遂げるのです。

なお、ガンディーが現在ののように西欧社会でも広く尊敬を集めている背景には、ネルーの存在があったからだとは私は考えています。

ガンディーはイギリスのインナー・テンブル法学院に学んで弁護士資格を得ましたが、反英独立運動のリーダーになったことで、弁護士資格を剥奪はくたつされていました。その弁護士資格が元に戻され、名誉が回復されたのは、戦後になってからです。

戦後間もなく、ネルーを顕彰する祝賀会がロンドンで開かれ、英国政府関係者の重鎮じゅうちんがずらりと揃いました。その会で真っ先に立ってネルーを誉めたたえるスピーチをしたのが、ウインストン・チャーチルでした。そしてその席で、ガンディーの弁護士資格が元に戻されたのです。つまり、弟子のネルーが受けた栄誉の恩恵に浴する形で、師匠ガンディーの名誉回復がなったわけです。

ネルーはイギリスの上流社会においても、最高の敬意を捧げられていました。彼には西欧的な側面が強くあり、イギリス社会にも自然に受け入れられる存在であったのです。

しかし、ガンディーはそうではありませんでした。独立前、ロンドンで開かれた円卓会議で交渉のテーブルについたときにも、ガンディーは裸に布一枚をまとい、サンダル履きといつもの出で立ちでした。その風体を見て、チャーチルは「アジアから来た乞食坊主こじき」と嘲あざけったのです。もちろん、ガンディーはそんな罵詈雑言などまったく意に介さなかったわけですが、ともあれ、ガンディーはネルーとは違って、英国社会にはすんなりとは受け入れられなかった人間でした。とくに貴族階級の人々からは、強い拒絶反応を示されていたことでしょう。

しかし、弟子のネルーの活躍によって、やがてガンディーも偉人として遇されるようになっていったのです。

次元は異なりますが、それはソクラテスとプラトンの関係にも似ています。もしもプラトンが弟子としてソクラテスの言行を後世に伝えていなかったなら、ソクラテスが偉大な哲学者、教育者として名を遺すことはなかったかもしれない。同様に、ネルーがいなかったら、ガンディーに対する西欧社会の評価もかなり違うものになっていただことでしょう。

そんなところにも、私は美しい師弟共闘の姿を見るのです。

非暴力と禁欲に、世界が近づきつつある？

ガンディーの精神を二一世紀の我々がどう受け継いでいくべきかを考えるとき、最も重要な論点となるのは「ガンディーの非暴力思想をどう継承するか」ということでしょう。

ガンディー以前には、「非暴力」というと平和運動の一つの理念としかとらえられていませんでした。「狭義の非暴力」であつたわけです。

もちろんガンディーにとって、独立運動や反差別闘争の中で、警官に根棒で打ち据えられたりしてもけつして抵抗しないということは、非暴力の核心部分でした。しかし、それだけではない。すでに論じたとおり、ガンディーが自らの男性性を乗り越え「母になろう」としたのは、男性

性の中に暴力性の根源をみただけです。そのように、彼にとっての非暴力は、暴力をその根っこから絶とうとする根源的なものでした。

ノルウェーの平和学者で「平和学の父」とも呼ばれるヨハン・ガルトウングは、暴力についての考え方を大きく塗り替えた「構造的暴力」の概念を提唱しました。

人を武器で殺したりする直接的暴力だけが暴力ではなく、貧困・抑圧・差別なども「構造的暴力」なのであり、それをなくさないかぎり平和はこない、それがガルトウングの打ち立てた新しい平和観でした。

私はこのガルトウングの平和観と、「構造的暴力」の概念自体、ガンディーの非暴力思想の影響下にあると思います。ガンディーにとっての非暴力は、もともと貧困や差別などの「構造的暴力」を射程に入れたものだったからです。

たとえば、いまや日本でも大きな社会問題になりつつある貧困問題や格差の問題も、ガンディーの非暴力思想をもって解決を目指すべき対象なのです。

そして、非暴力を突きつめていったガンディーが、一方では禁欲を突きつめていったことは、必然でした。非暴力と禁欲はコインの裏表のようなもので、深い関連性があるからです。けっきょく、暴力がもたらすさまざまな不幸を私たちが乗り越えるためには、人々が自らの欲望のコントロールに向かうことが不可欠なのです。

貧困・格差という「構造的暴力」を例にとっても、その背景には富める者・富める国の飽くな

き欲望の追求という問題があります。だから社会全体が欲望の抑制に向かうなら、貧困・格差の問題はおのずと解決に向かつていくでしょう。

昨今の日本では、「草食系男子」が増えていくという話があります。性的に淡泊で、自動車などのモノに対する所有欲も乏しい若い男性をそう呼ぶようです。私はそこに、一筋の希望を見出します。飽くなき欲望の追求が是とされたバブル経済期とは逆に、「欲望をむき出しにするのはダサイ」とする風潮が生まれつつあると感ずるからです。

もちろん、「草食系男子」の増加にはマイナス面もあるでしょう。それは、たんに生命力の減退にすぎないのかもしれませんが。また、日本があまりに豊かになりすぎたがゆえに、「ほしいモノはだいたい手に入れてしまった。したい体験もできた」という過飽和の状況から生じた一時的な現象にすぎないのかもしれませんが。

しかしそれでも、私はあえてプラス面をそこに見たいのです。ガンディーが目指した禁欲的な社会に、我々は自然な形で近づきつつあるのではないかと……。と……。

また、これは男性にかぎったことではありませんが、最近美容法・健康法としての「断食」に対する関心が高まっています。「断食道場」のたぐいが、日本でも各地にあるようです。それもまた、人々が禁欲的方向に向かいつつあるという一つの証左でしょう。

もちろん、楽観はできません。昨今の隣国との領土問題を背景に、暴力的な排外主義も一部の若者の間に広がっています。悪い意味で男性的な「肉食系」の欲望が、ここでは鎌首くひをもたげて

いるわけです。

しかし、総じて言うなら、いまの若者は一昔前の若者と比べて欲望の抑制に向かいつつあるのではないでしょうか。そしてそれは、けっして日本だけではなく、世界的傾向であるようにも思えます。少し前の「スローライフ」ブームや「ロハス」ブームに見られるように、大量消費を是とする欲望肯定的なライフスタイルは、もはや世界的に時代遅れになりつつあるからです。その意味では、先進国がこぞって欲望の飽くなき追求に突き進んだ二〇世紀後半とは異なり、二一世紀の世界は少しずつガンディーの望んだ方向に進んでいると言えるでしょう。「善きことはカタツムリの速度で進む」というガンディーの名高い言葉のとおり、カタツムリのごとき歩みではあります……。

また、急速に少子高齢化が進む日本ですが、これからの高齢者の生き方という観点から考えても、ガンディーの生き方は多くの示唆を含んでいます。

戦後の日本人は、平均寿命が伸びれば伸びるほど、それに比例して高齢者たちが欲望を肥大化させてきました。「もっと長生きしたい」「もっと健康でいたい」「もっと贅沢がしたい」などと欲望を追求することが、高齢者としての幸せだと考えられてきたわけです。それは、昔の日本人が「老い」に対してもっていた美学とはまったく逆の方向性を示していました。昔は、高齢者は知恵を豊かにもった賢者であり、欲望をコントロールする力をもっていることこそ「よき高齢者」たる証あかしであったのです。

その点、ガンディーの人生はまったく逆だったといえないでしょうか。若き日にはギラギラと欲望を追求していた彼が、年齢を重ねるにつれて禁欲を徹底させていき、最晩年には「長生きしたい」という究極の欲望さえ完全に捨て去っていたからです。

もちろん、ガンディーのような徹底した禁欲は、凡人が真似のできるようなものではありません。しかし、方向性として「年を重ねるほど欲望を減らしていく」ことを、我々はガンディーに学ぶべきだと思います。

アジアとアフリカを結んだガンディー

ガンディーはインドというアジアの大国に生まれ育ち、西欧の中心たる英国に学び、のちにはその英国を相手に正面から闘いました。そしてその間には、アフリカの地で長年暮らしています。つまり、アジア、ヨーロッパ、アフリカという三つの世界と、それぞれ深くかかわって生きてわけてです。これはなかなか稀有な、まさに現代世界そのものを一身に体現したような人生であったといえるでしょう。

若き日の一時期は「英国紳士の猿まね」のようなことをしていたガンディーですが、やがて西欧文明の限界と危険性に気づき、アジア・アフリカの側に立って西欧と対峙^{たて}する道を選びました。

ガンディーが南アフリカでくり広げた反差別闘争は、直接的には、そこに暮らすインド人たち

が受けていた差別の解消を目指したものでした。しかし心情的には、ガンディーはアフリカの人々の側に立っていたのです。

周知のとおり、アフリカ各国は長年西洋列強の植民地支配に苦しめられ、ガンディーの死後になつてようやく独立を果たしていきます。だからこそ、ガンディーにとつてアフリカの民衆は、インドの民衆と同様に、彼の「同苦」の対象であつたはずで

す。これは想像でしかありませんが、もしもガンディーが暗殺されず、あと一〇年長く元気に活動したとすれば、彼はアフリカの国々の独立のために闘つたのではないでしょう

か。そして、一九六〇年前後にいっせいに独立を果たしていったアフリカ諸国で、それぞれ独立闘争を担つたリーダーたちは、多かれ少なかれ、ガンディーの非暴力思想とインド独立闘争から影響を受けていたはずで

す。彼らもガンディーの精神を受け継いだ後継者たちであつたのです。二〇一一年には三人の女性がノーベル平和賞を受賞しましたが、三人とも、ガンディーの非暴力思想に影響を受けています。そして、三人のうち二人は西アフリカのリベリア共和国の人です。

その三人にかぎらず、戦後のノーベル平和賞受賞者の大半が、何らかの形でガンディーの影響を受けていると考えられます。その意味で、ガンディーの非暴力思想は世界平和に大きな貢献を果たしているのです。

その中でも、とりわけアフリカ諸国の平和を担う闘士たちにガンディーが与えた影響は、非常に大きいものです。

たとえば、南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ元大統領と、ケニアのワンガリ・マータイ。その二人のノーベル平和賞受賞者は、ガンディーの非暴力闘争の正当な後継者と呼んでよい存在でしょう。

たとえば、マンデラがくり広げた反アパルトヘイト闘争は、武力によらない非暴力闘争でした。また、ガンディーが独立闘争の過程で敵である英国側の人々も味方に変えていったように、マンデラは大統領になってからも白人に対して復讐はせず、むしろ白人と黒人が手を携えて国を運営していく道を選びました。

また、マータイさんの代名詞ともなった「モツタイナイ」は、ガンディーの禁欲や「足るを知る」の精神を受け継いだものといえます。そして、マータイさんが指揮して大きな成果を上げた「グリーンベルト運動」(土壌の浸食と砂漠化を防止する植林活動で、ケニアのみならずアフリカ全土に広がった)は、貧しい女性たちを中心とした運動でした。それは、女性が平和に果たす役割を誰よりも重視したガンディーの精神を受け継ぐ、見事な非暴力平和闘争だったのです。

私はマータイさんと、『毎日新聞』紙上で対談したことがあります。彼女が二〇一一年にガンで亡くなる一年前のことです。

その対談の中で、マータイさんは「ナイロビ大学の中に平和研究所を作る予定です」と言われ、発足したら私を招待するから、ぜひ来てくださいと誘われました。それが実現しないままマータイさんが亡くなられたことは残念でありませんが、その平和研究所もまた、ガンディーの影響の

下に構想されたものでした。

マンデラ、マータイ両氏の活動が象徴するとおり、ガンディーはいわば、「非暴力思想でアジアとアフリカを結んだ」のです。

宗教性をベースにした社会改革の重要性

二一世紀の我々がガンディーから学ぶべきものとして、もう一つ、宗教性を重視する姿勢が挙げられるでしょう。すなわち、日々の生活の中心軸として宗教性を重んじ、宗教性をこそ社会改革の原動力にしていく姿勢です。

「宗教」ではなくあえて「宗教性」と書くのは、ガンディーが一宗一派に偏らない広い視野を持ちつづけた人だったからです。

もちろん、ガンディー自身はヒンドゥー教徒でした。しかし彼は、ヒンドゥーの価値観に凝り固まって視野しや狭窄きようさくに陥ることはけっしてありませんでした。諸宗教を超越する「宗教性」を志向していたのです。

日本人にありがちな誤解として、「一つの宗教を信じている人は排他的・独善的になり、他の宗教に対する寛容性を失う」と短絡的に決めつけることがあります。

もちろん、自分の宗教だけに凝り固まって非寛容になる人は、どの宗派にもいます。しかし、

真に「宗派を超越した宗教性」をもつためには、何か自分の「核」となる宗教を持ち、その上で他の諸宗教と接することが不可欠です。どの宗教も信じていない無神論者であつたなら、そもそも宗教性など持ちようがないからです。

そしてガンディーこそは、そのような「一つの宗教を信じつつ、宗派を超越した視点をもつ姿勢」において模範ともいふべき人でした。

よく知られていることですが、ガンディーは暮らしていたアシュラムで、日々の祈りの中でヒンドゥー教のみならずさまざまな宗教の祈りの言葉を取り入れていました。聖書の祈り、仏典の言葉、「南無妙法蓮華経」の題目、イスラム教やユダヤ教の祈りまで、さまざまな言葉を日々唱えています。

ガンディーが創設したアシュラムはいまもインド各地にあり、修行者たちが暮らしています。私もそのいくつかを訪ねたことがあります。ガンディーの教えを受け継ぐ修行者たちは、いまもそのように諸宗教の祈りを毎日唱えています。

それこそが、ガンディーの「宗派を超えた宗教性」を象徴するものだといえるでしょう。ただし、そのような姿勢を保ちつつ、ガンディーはあくまでもヒンドゥー教徒であり、ヒンドゥーの教えが彼の生き方の核になっていたのです。

ガンディーはその晩年、印パ分離独立をめぐるヒンドゥー教徒とイスラム教徒の双方から憎まれました。それもまた、ガンディーが「宗派を超えた宗教性」を持ち、イスラム教も重んじて

いたからこそなので。

そして、ガンディーの「一つの宗教を信じつつ、宗派を超越した視点をもつ姿勢」は、グローバル化が進み、他宗教の信者とも接する機会が増えた二一世紀のいまこそ、いつそう光彩を放つものといえます。それは、「二一世紀の世界市民」が持つてしかるべき視座ではないでしょうか。話が飛躍するようですが、私は、インドがいま隆盛し、アフリカ諸国がいまなおさまざま苦しみの渦中にあることも、その背景に宗教に対する姿勢の違いがあるからではないかと考えています。

アフリカはいま、ほとんどの国がイスラム教圏かキリスト教圏になっています。つまり、長年の植民地支配によって、伝統的な土着の宗教や世界観、価値観が、ほとんど根絶やしにされてしまっています。

対照的に、インドは三〇〇年前に大英帝国に支配されて植民地になりながらも、ヒンドゥー教の文化土壌は手つかずのまま保存されて生きつづけました。それは英国が、植民地支配をつづけながらも、カースト制度と伝統的な法には手をつけないで残し、その上に接ぎ木するような形で近代的な仕組みを持ち込んだからです。

その結果、インド社会は二重構造化し、憲法上では近代的な平等を掲げながらも同時に、伝統法の中ではカースト制度が生きつづけました。そのため異なるカースト間の結婚は許されない、などという悪い面も多々温存されたわけですが、一方で、伝統的なヒンドゥー文化とその価値観

を温存したからこそ、いまのインドの発展もあるという面も見逃せません。

昔ながらの文化のパワーを根絶やしにされなかつたからこそ、インドはアフリカ諸国と違って「世界最大の民主主義国」になり得たのではないでしょう。

宗教というものには、そのように、国を生かしてもすれば殺しもある、底知れぬ力があるともいえそうです。「もう二一世紀だから、宗教など社会に必要な」と考える人は、そのような宗教の力を知らないのだと思います。

私は宗教学者の一人として、二一世紀にも宗教の重要性が薄まることは決してないと確信しています。それどころか、宗教の力は今後いつそう、社会を根底部分で動かす重要な駆動力くどうりよくとなっていくでしょう。

宗教性をベースに、民衆による社会改革を成し遂げた人といえば、もう一人、米国のマーティン・ルーサー・キング牧師を挙げないわけにはいきません。キングもまた、自らはキリスト教という核を持ちながら一つの宗教に偏しない宗教性の力で民衆を動かし、「米国史上、奴隷解放以来最大の社会改革」と呼ばれた「公民権運動」を指導しました。

ガンディーとキングの二人を結ぶ、暗殺されたこと以上に大きな共通項こそ、「宗教を社会変革の基盤となる『力』に昇華させ、苦悩する民衆に勇氣と希望を与えた」ということなのだと思えます。

人々の心を正しく清らかな方向に向け、社会を変える力にする——そのような宗教本来の力が、

いまこそ求められています。

「私の人生が私のメッセージです」という、ガンディーの名高い言葉があります。このガンディーの「メッセージ」を、私なりに別の言葉で要約するなら、それは次のようなことになるのではないかと思います。

「宗教性に基づく欲望のコントロール、そしてそのことで実現される非暴力によって、民衆一人ひとりが世界を平和の方向に向けていくこと——それがいま、何よりも求められている」

ガンディーはけっして雲の上にいる聖者ではなく、苦悩する民衆の海の中に飛び込んで生涯を生き抜いた人でした。彼がその生涯のすべてをかけて訴えたメッセージは、雨だれが石を穿つように、少しずつこの世界を変革していくであろうと私は思っているのです。



地人館 E-books デモ版
紙面のイメージは電子版と異なります。

山折哲雄 (やまおり てつお)

1931年、サンフランシスコ生まれ。岩手県出身。

東北大学文学部印度哲学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。

駒沢大学、東北大学文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、所長などを歴任。同センター名誉教授。思想家、宗教学者。2002年、『愛欲の精神史』で和辻哲郎文化賞受賞。

主な著書

『生老病死』(KADOKAWA) 『米寿を過ぎて長い旅』(海風社)、『「身軽」の哲学』(新潮社) 『激しく考え、やさしく語る 私の履歴書』(日経BP) 『ひとりの覚悟』(ポプラ社) 『老いと孤独の作法』(中央公論新社) 『「歌」の精神史』 『わが人生の三原則』(中央公論新社) 『危機と日本人』(日本経済新聞出版)、『聖と俗のインド』(地人館 E-books) など多数。

母なるガンディー

著者 やまおりてつお 山折哲雄

初版発行 2021年8月30日

発行 ちじんかん 地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

©2021 Tetsuo Yamaori